
カントー私立ポケモン学園

ジャガイモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カントー私立ポケモン学園

【Nコード】

N8480W

【作者名】

ジャガイモ

【あらすじ】

この話は一匹のピカチュウが『カントー私立ポケモン学園』の中の学園生活であり、ギャグ連発、ポケ連発、笑い連発とさまざまなおきる物語である。

第1話 プロローグ(前書き)

はい！ 第一話です。

ポケ夢と同じ感じがしますが気にしないでください。
それではスタートです。

第1話 プロローグ

ジリリリリリリリ……………。

部屋に目覚まし時計の音が鳴り響く。それを、一匹のポケモンがとめる。

そのポケモンは全体的に黄色く、背中にシマシマ模様さらに大きな尻尾もある。

そのポケモンの名前をピカチュウという。

「ふあああゝ。今何時だ？」

ピカチュウは時計を見る。針は8時を回っていた。

「ヤバイ！ 遅刻する！」

今日はカントー私立ポケモン学園の入学式がある。ピカチュウも今日からその学校の生徒になる。

カントー私立ポケモン学園とは、一番最初のポケモン学校である。学校自体は普通だが、毎年入学生徒が多く部活動も活発になっているので入学率がとても高い。

そう話しているとピカチュウは準備を終え、家を出ようとしていた。

「じゃあいつてくるね」

「気をつけてね」

ピカチュウは母に声をかけ、家を出た。

これから、ピカチュウの学園生活が今、始まる。

第1話 プロローグ（後書き）

最初なので、こんな感じだと思います。

次回から大爆笑の物語がスタートします。

ピカチュウ「本当かよ」

まあご期待ください！

それでは

第2話 入学式と自己紹介（前書き）

はい！ 第2話です。

ピカチュウ「この小説何話まで続くのかな？」

そんなことより、ピカチュウ時間は？

ピカチュウ「あっ！ もうすぐ入学式だ急がなくては！」

待て！ あーあ行っちゃったよ……………。

ではどうぞ！

第2話 入学式と自己紹介

ピカチュウは全速力で走っていった。すると、前に一匹のポケモンがいた。

「あっ！ ロコン」

ピカチュウは体は全体的に赤色で、尻尾は6本に分かれているポケモンロコンと出会った。ピカチュウは彼女とは幼馴染である。

「ピカチュウ君、おはよう」

ロコンはピカチュウに挨拶をした。

「こんなにゆっくり歩いていいの？」

ピカチュウはロコンに聞く。

「えっ！ 知らないの？入学式は10時からよ」

ロコンはきちんと答えた。

「どうして1時間ずれたの？」

本来は9時から入学式が始まる予定で入学生は8時半に学校に集合するはずだった。

「なんか校長先生が気分的に10時がいんだって」

「なんじゃそりゃ〜！」

ピカチュウは叫んだ。

「まず、気分て何？そんなんで校長務まるの？それはおかしいだろ」

「あーあまたでたよピカチュウ君の突込み癖」

ピカチュウはとにかく突っ込むことはとことんと突っ込む癖がよく出る。

そうしばらく話していると学校に着いた。

「ここがポケモン学園か〜」

ピカチュウは学園全体を見る。

全体的に校舎は綺麗でまるで最近できたばかりの校舎に見えてきた。

「えーとクラスは同じ4組だよ」

ロコンがそういう。

「本当だよかったこれからもよろしくね」

「うん」

二人はそういい、教室へと入っていく。

「ここが1年4組か〜」

ピカチュウたちは中に入る。教室は汚くはないが綺麗というまでで

もない。とりあえず、教卓へいき、席を確認した。

「席は……………あそこだ！」

ピカチュウが指をさした席は教卓の目の前の席だった。

「さす必要もなかったんじゃない？」

「……………そうでしたね〜」

ピカチュウは少し唾然した。

キーンコーンカーンコーン……

学校のチャイムが急になり始めた。

ピカチュウたちは急いで席に座るロコンはピカチュウの席から3つ後ろの席に座った。

「おーい。席に座れ〜」

すると、担任の先生らしきポケモンがきた。体には甲羅があり、肩にはキャノン砲があるポケモンカメックスだ。

「えーと今日からこの一年3組の担任になるカメックスだ。教える科目は体育みんなよろしく」

カメックスはきちんとあいさつする。

「あ〜先生」

「リオル、何だ？」

ピカチュウの隣にいるポケモンが質問した。体は全体的に水色でリオルと呼ばれているらしい。

「ここって1年4組なんですけど………」

「本当か？」

「はい」

それを聞くとカメックスは急いで教室を出て行った。ピカチュウはどうにか突っ込みをこらえた。そして、本当の担任が来た。

「うーす。今日から1年4組担任のリザードンだ。担当教科はポケモン学だ。これから1年よろしく」

リザードンは全体的にオレンジ色で尻尾には炎が燃え盛っている。ちなみにポケモン学とは、ポケモンの神話や伝説を中心に固体値や努力値などポケモンについての知識を勉強する。

「んじゃあこれから入学式が始まるから、適当に並んで体育館に行つて来い」

リザードンにいわれるまま適当に並び、体育館に向かった。

「えーこれからカントー私立ポケモン学園の入学式を始めるでござます」

そういうのは副校長のペルシアンだ。体は白い毛に覆われている。

「最初は校長先生の話さます」

なんかさます、さます聞いてるとむかついてくるが副校長のためそれをいっただら退学になりかねないからまたこらえた。

そしてゆっくりと教壇にあがってくる校長先生ちなみに種族はヤドランだ。そしてマイクをもって話し始めた。

「皆さんこんにちは。えーっとわしは……誰じゃっけ？」

ヤドランがそういうと、生徒の大半以上がズコーとなり、先生までもがなりかけた。

「校長これを」

ペルシアンが1枚の紙を渡す。

ヤドランはとりあえずその紙を読む。

「皆さんこんにちは。私がこの学園の校長のヤドランです。皆さんたちがどんな学園生活を遅れるか心配ですが、その1日1日を大切にしてください」

生徒たちは啞然としながらも拍手を送った。

「こほんでは、次に生徒会長の話さます」

すると、生徒会長が教壇にのぼりマイクをもった。

「皆さんこんにちは。私が生徒会長のミュウツーです。我々生徒会は学園に役立つことを主に活動しています。皆さんも生徒会役員に会ったら要望や疑問を教えてください。すぐに検討し、できるだけ早く実行しますのでよろしくお願いします。」

ここはなにもなく拍手がでた。

「それではこれで、入学式は終わりざまです。あとは各教室で授業に必要なものなどを渡しますので一度教室にもどるぞます」

ペルシアンに言われた通りに教室に戻った。

「じゃあ自己紹介してもらおうか」

リザードンがそういう。

「窓側から初めてくれ話すのは名前、特技だけでいいぞ」

「えっとビリリダマです。特技は大爆発です」

「ジユペッタです。特技は空気化です」

「ちょ、空気化って」

ピカチュウが突っ込むがしかし、自己紹介は続く。

「コイキングです。特技ははねることです」

「先生、ちょっと待ってください」

ピカチュウが立ち上がる。

「ん？なんだピカチュウ」

リザードンが欠伸をしながらピカチュウに聞く。

「ここ、すごい個性的過ぎませんか」

「だって普通そついうもんだろ？」

「ちょ……………そついうもんでもものにもほどがあるでしょっ？」

「じゃあ個性はなくていいのかよそんなこといったらお前の突っ込みも禁止にすつぞ」

「すみませんでした」

「」「誤るの早っ！」「」

いつもは突っ込むピカチュウも今日は素直に謝った。

「んじゃ続けて」

「ラティアスです。特技は特にないけどよろしくね」

「え、えっとロコンです。……………特技はないですけど、よろしくお願ひします」

ロコンは緊張したのか席に戻るときほつとしながら戻っていった。そして後ろのラティアスもよろしくと挨拶をして、友達になった。そしてピカチュウの番がきた。

「……………ピカチュウです。特技は特にありません」

「嘘だろじゃあその突っ込みはなんだ？」

「うっ！」

リザードンが突っ込む。

「先生すごい」

「えっ、何で？」

ロコンがの呟きにラティアスが聞き、ロコンに質問した。

「ピカチュウ君の突っ込みはおそらく一番を取れる力があるのに先生はそれをいともたやすく言葉を返す。普通は返すことなんてできないレベルなのに……………」

「そうなんだ」

ラティアスは軽く驚きながらも、普通に答える。

「……………特技は……………突っ込みです。」

「よし、よく言えた」

リザードンは軽くほめる。ピカチュウはどよんとしながら席に戻る。

「じゃあ次」

しかし、まったくピカチュウには関心がなかった。

「リオルです。特技は波導をコントロールすることができることです」

「それって、普通のリオルと同じなんぞ」

「お前は一回黙れ！」

「ひっ！ ……すいませんでした」

ピカチュウは周りの人から怒られ、しばらく黙った。いつ泣くかわからない状態になった。

「あれはちょっとかわいそうじゃない？」

「いや大丈夫。あんなになっても、明日にはまた元気になるから」
「へえ」

そして次々と紹介が終わり、色々と学校で必要なものを配られ学校は終わった。

放課後

「はあ〜今日は散々だった〜」

ピカチュウはどよんとしたムードがまだ続いていた。ロコンはラティアスと先に帰った。

「あつ！ピカチュウ君」

ピカチュウは声がしたほうに振り向いた。すると、リオルがいた。

「ん？どうしたのリオル君？」

ピカチュウがリオルに聞く。

「あのさ、僕と友達になろうよ」

リオルは普通に誘った。

「え、いいよ」

「さらっといったね」

本当にさらっとである。

「でも、僕以外にも友達いるでしょ？」

ピカチュウはそうリオルに聞く。

「もちろんいるよだって君といると、楽しい空気になるんだよ」

ピカチュウにとってリオルの答えは意外だった。

「じゃあこれからよろしくね」

「こちらこそよろしくー！」

こうしてピカチュウに新しい友達ができた。

第2話 入学式と自己紹介（後書き）

はい！ やつと終わりました。

ピカチュウ「担任が御三家しかいないじゃん」
今のところはね。

ピカチュウ「今のとこって」

じゃあ今回はこころで

ピカチュウ「あっ！ 逃げるな！」

それでは

ジャガイモは逃げ出した。

ピカチュウ「あっ！ 待て！」

第3話 部活動はどこに入る？（前書き）

はい！ 3話目です。

ピカチュウ「更新が早いね」

書いてると楽しいからね。

ピカチュウ「レオン先輩あたりに聞かれましたらまずいですね」

うん。

それではどうぞ！

第3話 部活動はどこに入る？

入学式から1週間後

「部活動？」

ピカチュウは首を傾げた。

「ピカチュウ君ってどこに入るの？」

リオルに聞かれた。

「うーん帰宅部？」

リオルはそれを聞いた瞬間それで良いのかと思った。

「本当に部活やらないの？」

「本当にやらない」

ピカチュウは即答した。

「と、とりあえず部活動体験に行かない？」

「……部活動体験？まあ暇だからいこうかなあ」

「本当にやったー」

リオルがなぜか喜んでる。

「んで、とりあえずどこから行くの？」

「それを決めてなかった。」

リオルはするつと答えた。

「ねえ、こういうのを聞くのは悪いと思うんだけど君って馬鹿？ま
ず、それを決めてから人をさそうでしょう」

すこし、毒舌が入った。

「じ、ごめんね。とりあえず、全部活回ろつか」

「それでいいよ」

ピカチュウはそれでokしたようだ。

「じゃあ水泳部から」

「何で!？」

「近くにあったから」

ピカチュウは目を見ると、水泳部の部室があった。

「えーとなになにに水泳部、100m自由形1分30秒を切っていない方はお断りだつて」

「まず、タイム以外に規制がないってどういうことだよ」

「まあそういう部活なんだろうね」

泳ぎ方は基本的に人間界のものと同じだ。100m自由形を1分30秒はおそらく作者でも無理であろう。

「もついい。次のところに行こう。」

「そつだね」

「次は科学部か」

「とりあえず中に入ろう」

リオルたちは中に入った。

「ではまず、マグネシウムとカルシウムをこの液体にいれてくださーい」

これを聞いた瞬間リオルたちはドアを閉めた。

「っていつかどうやってカルシウム取るんだよ！」

ピカチュウは一人で突っ込みを入れた。

「まあ、この牛乳を飲んで落ち着いて」

「う、うん」

ピカチュウは牛乳を飲んだ。

「ぷはーってこれは確かにカルシウムとっているよ、でも体内じゃん！」

ピカチュウは微妙な乗り突っ込みをした。

「……………次行こうか」

「そっだね」

「……………」

「……………は囲碁・将棋部だよ」

ピカチュウたちは中に入る。

「あっ、部活体験の人？囲碁・将棋部へようこそ！僕は部長のナマケモノです」

「おっ、ここは結構まじめだぞ」

ピカチュウはそう思った。しかし、囲碁・将棋どころか部をやっているかわからない状態になっていた。

「で、あなたたちはここで何をしているんですか？」

「ここでぐーたらしたり、遊んだりしているよ」

「まじめだと思った僕が馬鹿だった」

ピカチュウはそう思った。

「っ、次行こうか」

「次は何？」

「吹奏楽部だよ」

「吹奏楽ねえ〜あっロコンとラティアスだ!」

「あっ! ピカチュウ君」

「やっほー」

二人はピカチュウたちに軽い挨拶をした。

「二人とも、吹奏楽部の体験?」

「そうだよ」

ラティアスが軽く答える。

「んで二人は何してるの?」

ロコンが聞いた。

「同じく体験」

「ピカチュウが音楽?まさかやるわけないでしょう」

「え、なんでそんなこと決めるんだよ」

「だって音楽興味ないじゃん」

「うっ……」

ピカチュウはロコンに痛いところを突かれた。

「そこから抵抗できないんだね」

「……………」

「まあまあ、人にはその人だけのいいことがあるし」

「なんか酷い言い方のように聞こえてきたぞ」

ピカチュウは軽く抵抗した。

「まあその辺はいいけど、じゃあがんばってね」

ロコンたちはそのまま部活動体験を続けた。

「まあいいか次行こう」

「次は……………空気部？」

ピカチュウは空気部の部室の中に入っていった。

「あれ、だれもない」

ピカチュウはあたりを見渡すが、誰もその教室にはいないはずなのだが、なぜか気配が微妙に感じる。

「こんにちは。空気部長のゲンガーです」

「うわあ！」

ピカチュウたちは驚いた。

「ここはね、空気を消す練習ができるんだー」

「そんなのいりませんよ！　っていつかなんでそんな部活があるんですか？」

ピカチュウは敬語で突っ込んだ。

「僕たちが作った」

そういうと、ピカチュウたちは「なんかアホだろこの部活」と思った。気づくと、ジュッペツタまでいる。

まあ空気が好きって言ったもんね。ピカチュウたちはその教室からでた。

2時間後

「次はどこ？そろそろ疲れてきたよ」

「ここが最後だ」

「えーとお笑い部？何じゃそりゃ」

「と、とりあえず中に入ろう」

中に入った。

「どうもー ツギヨです」

「ちょっと待ったー！そこ しなくても良いでしょう。同じポケモンネタなんだから」

「ちょっと最後のほうがいすぎだと思っただけですけどー」

「合格！」

「え？合格って」

「このお笑い部に入る権利だよあつ！俺は部長のマツギヨな」

マツギヨはそういった。

「そこのピカチュウはこの部活に入る権利があるよー」

「まじで言ってるんですか?」

「まじだよ突込みの天才君」

「て、天才って言われちゃったらなあ」

ピカチュウは照れた。

「んじゃどうする、入る?」

「うーん」

ピカチュウは考えた。入れるのは一人一つ。ここにはいれば別の場所をあきらめなくてはならない。

「じゃあやめておきます」

「まじでいつてるの?」

「はい」

「ピカチュウ君まじめに言ってるの?」

「そうか…じゃあ俺の相棒」

「ちょ、いつの間に相棒になってるの!」

「はあ、入ってくれないのか、悲しいな」

「そんなことを言ってもはいりませんよ」

「そうかここにすれば、伝説の突っ込みを教えらるんだがな」

それを聞くと、ピカチュウはすぐに戻ってきた。

「はいります！ よろしくお願いします！」

「うむよからう」

「あーなんかだまされているような気がするな」

リオルはピカチュウをおいて、吹奏楽部のところへ行き入部届けを出した。どうやら、ロコンとラティアスも吹奏楽部に入ったようだ。

ピカチュウは結局お笑い部に入り、伝説の突込みを教えてもらうのは2年後の話であった。

次の日

「ん？何かあるぞ」

ピカチュウは学校でひとつの記事に目がいった。

それはなんと、ピカチュウのことが書いてあった。

その新聞の名を『新聞部新聞4月号』とかかれ、学校中に貼られているようだ。

その内容は『お笑い部に突っ込みの王出現！？』という見出しで出されていた。

このことで、大体の生徒にピカチュウのことが知られ、話の題材になったり、噂が流れたりするようになった。

ピカチュウはそんなことより、全部活の顧問の先生のほうが知りた
いらしい。

そして、ここからピカチュウの突っ込み王としての成長が今ほじま
る。

第3話 部活動はどこに入る？（後書き）

はい！ 今回は長からず短からずって感じですよ。

ピカチュウ「この新聞って番外編で出す？」

まあ基本そうなります。

ピカチュウ「……………本当にやるの？」

まじめに。では今回はここらで

それでは〜

第4話 リオル君のお家はどこですか？（前書き）

はい！ ポケ夢でも珍しくない』』ですか？』シリーズをまさかの
カントー学園でもやることになっちゃいました。

ピカチュウ「それって、タイトルネタがないんだろ」

その通りです。

ピカチュウ「そこ元気よく言っな！」

それではどうぞ！

第4話 リオル君のお家はどこですか？

入学式から2週間たった。

1年4組の生徒は全体的に仲良くなった。ピカチュウもまたいろんな人と友達になった。

おそらく理由としてはあの新聞の記事をみてだろうな。

〈教室〉

「あつ！ ピカチュウ君いいところいた」

ロコンがピカチュウを呼んだラティアスも一緒にいる。あの二人はこの3週間で互いを信じれる仲になったらしい。

「ねえそろそろその君付けやめない？ 幼馴染なんだし」

ピカチュウはロコンに聞く。

「え？ だめなの？」

「だめではないけど…」

「じゃあいいじゃん」

「う〜……………」

ロコンはするっと答え、ピカチュウはなぜか悔しさを感じた。

「それよりどうしたの?」

ピカチュウがロコンに聞く。

「ああ、そうそう! あのさ、リオル君の家ってさ興味ない?」

「興味を持つと思う?この『突っ込み王』が」

ピカチュウは自慢げにそういった。結局『突っ込み王』というのは認めたらしい。

「そういと思った」

「……………」

ピカチュウはさらに悔しさを覚えたのか、とうとうしゃべらなくなつた。

「よつするに、ロコンちゃんが言いたいの噂だとリオル君の家は誰も行った事がないんだって! さらにあんなにカッコイイじゃん。さらにロコンちゃんのリオル君のことが……………」

「それは言っちゃだめー!」

ロコンは必死にラティアスを止めた。

「……………簡単に言つと、僕に尾行しろと」

「その通りです。賞金も出ます!」

ロコンは簡潔に言った。

「ねえ、なんで僕に頼むの？」

「だってピカチュウ君しか頼む人がないから。それと、金に目がくらむかな〜って」

「それはさすがにない。どっかの作者でもないし」

ピカチュウは普通に断った。

「じゃあ今後私はピカチュウ君を呼ぶとき、君付けしないから」

ロコンはそれを条件にピカチュウにお願いした。

「うーん。……いいただし金もね」

ピカチュウはOKした。

「結局金に目がくらんだね〜」

「そ、そういうわけじゃなくてこの金は雇うために使うんだよ」

「雇う？ 誰を？」

ラティアスは疑問に思う。

「決まっているさ！ おーいジュペッタ君」

ピカチュウはジュペッタを呼んだ。幸い近くにいたため声が聞こえ

たらしくピカチュウの前に来た。

「はい用件は何〜？」

ジユペッタはピカチュウに聞く。

「君にリオル君の尾行をお願いしたい」

ピカチュウは用件を言った。

「うん〜いいよ〜。ただし、お金ちょうだい！」

ジユペッタは金を要求したがピカチュウは「それは任務が終了したらあげる」といい、後払いにさせた。

そうすると、ジユペッタは「わかった〜」といい、ビデオカメラを持ち、ちようど出て行くリオルを尾行し始めた。

「よし、後は明日ビデオの内容を見ればいいはずだ。これでいいだろ?。」

ピカチュウは欠伸をしながらロコンに聞く。

「それでいいわ。じゃあね！ ピカチュウ」

「まったね〜」

ロコンとラティアスはそのまま教室を出た。

「あつ！ お金……………しゃーない僕も帰るか」

そついいピカチュウは教室を出た。

（翌日）

「何！ 破壊されただと！」

ピカチュウは教室で叫んだ。どうやら、リオルにカメラを壊されたようだ。

「うん。空気になる力が足りなかったのかな？」

「空気になる力？」

ピカチュウは首をかしげた。

「空気になる力は影が薄くなればなるほど、力が上がるんだよ。ちなみに尾行中は3割くらいだよ」

「へえ…ってかどうすれば影が薄くなるの？しかも尾行中に3割っていつもは何割なの？ねえ、何割なの？」

ピカチュウは完全に突っ込んだ。

「うーんとね、いつもは2割くらいかな」

ジユペッタが答える。

「ていうかなんで10割で行かないんだよ！ 普通そつだろ！」

「うーんとね、10割を使うとね本当に僕がいなくなったことにな

るのと同じだから、使うのは個人的に禁止にしてるんだ。さらにね今以上いくと、間違えると僕の周りの人に忘れられちゃうから尾行に対してはこれが限界なんだ。ごめんね。」

「……………そうなのか、せめてごめん。」

ピカチュウは謝った。

「いいよ。僕のことを大切に思ってくれていれば。」

ジュペッタはピカチュウを許した。

「あつ！ピカチュウとジュペッタ君だ！」

そこにロコンが教室に入ってきた。

「で、どうだったの？」

「それが、失敗したってさ。」

「ジュペッタ君の空気化でも、感づかれちゃうの!」

ロコンは少し驚いた。

「あ、それについては……………」

ピカチュウはジュペッタのことを話した。最大限にすると彼がいなくなるのと同じになること、強くすると周りが彼がいなかったこととなること……………。

「なるほどね。ありがとうねこんな人に話したくないこと話してくれて」

「うんいいんだ。何で本気を出さなかったのかわかってもらえば」
ジユペッタは、またもや軽く許してくれた。そこにラティアスがきた。

「おはよう」

「「おはようラティアスちゃん」」

「あつあたしは普通にラティアスでいいよ」

ラティアスにそういわれ、ピカチュウ達は「わかりました」という。

「しょうがない。最終手段だ！」

「「「最終手段!?!?!」」」

「リオルを僕たちが尾行する」

ピカチュウにしては大胆な選択だ。

「ちょっと待った。上の描写なんだ？ 僕はそこまで大胆じゃないぞ」

地味にメタ発言な気がするが、気にせず全員で尾行することにした。

〈放課後〉

リオルが教室を出る。

「いまだ！ 行くよ」

ピカチュウ達も気づかれないようにリオルについていった。

リオルはゆっくりと歩いていく。ピカチュウ達もついていく。そして1つの建物に着いた。

「……………すごい」

ロコンが呟く。大きさは学園と同じくらいで、まるで豪邸といっても過言はないであろう。

「あつ！ あれ見て」

ラティアスがいう。リオルが家の前で何かに触れた。

「おそらく指紋認証装置みたいなものだZE！」

「おそらくはね……………ねえ、今誰が言った？」

ピカチュウがみんなに質問する。

「それは俺がいったのさ」

「！ 誰だ！」

ピカチュウは後ろを向きいった。

「俺かい？ 俺は通りすがりのヒヒダルマだZE！」

「うわーうざキャラっぽいのがきたよ」

ピカチュウはそういった。

「ちょっと待つんだZE！ なんださういう言い方をするのは失礼だZE！」

ヒヒダルマはピカチュウに説教するような言い方で返した。

「へーい」

ピカチュウはだるそうに答えた。

「この~~~~~！」

ヒヒダルマは怒った。

「まあまあ落ち着いてください。それに何か知ってるから話しかけてくれたんですね？」

ロコンは親切に質問した。

「あ、……………は、……………はい！」

ヒビダルマは照れながら答えた。このときラティアスは「この人恋してるね」と呟いた。

「俺は何気に開発部でな、機械のことは大体のことはできるZE！
例えばパソコンのハッキングとか……………」

「ふーん」

ピカチュウは軽くうなずいた。

第3話では紹介していないが、ほかにも存在していいのかと言えるレベルのものの部活もある。開発部はその間にある。

「あんな機械は普通に破壊することは可能だZE！」

そういつと、ヒビダルマは機械に近寄り、色々といじくり始めた。

「時間がかかりそうだね」

ロコンがそう呟く。

「ジュペッタ君が空気化してるよ」

ラティアスがそういつ。ジュペッタはさっきからまったくしゃべってないので、全員に忘れられていたようだ。

しかし、彼いわく「これは空気化する特訓だよ」といった。

「……………これでよし！ これで通れるZE！」

ピカチュウ達はそれを聞いた瞬間ヒビダルマに「ありがとう」とい

い、さっそうと家の中に入っていった。

「ここがリオル君の家か」

ピカチュウは呟く。

「ねえアンナさん、しばらくしたら友達を読んでもいい？」

どこからかリオルの声が聞こえた。声が聞こえる部屋を見つけ、ドアに隠れ話を聞く。

「うーん、とりあえずご主人様に聞かないといけませんねえ」

リオルではない声が聞こえた。どうやらアンナさんというらしい。見る限り、種族はサーナイトのようだ。

「じゃあいつになる？」

リオルが聞く。

「ふふふもっていますよ……出てきてください」

「………なんでバレたんですか？」

「！ピカチュウ君にほかの皆も……」

リオルが驚く。

「私は波導を読む力があるんですよ」

「……………波導!？」

ピカチュウ達も驚く。

「私は昔からこの家に昔から仕えていますので、波導の力を遺伝させてもらいました」

「ちょっと待ってください! 遺伝ってそこまでいたるまでに何があっただんですか?」

「それは秘密です」

「ですよね」

ピカチュウはわかったような言い方で返事をした。

「遅れましたがわたくしはこの屋敷の執事のアンナと申します」

アンナはそういう。

「ちょっと待って、てことはリオル君は豪邸の一人息子!？」

ロコンがそういう。

「そうだけど何か?」

リオルはあっさりと答える。

「ねえ、そういえばなんで家の前にあった指紋認証装置で引っかかりなかったの?」

リオルがピカチュウ達に聞く。

「そ、それは……………」

「通りすがりの方が破壊してくれたんです」

ラティアスが答える。

「そうですか…その方には弁償してもらいましょうかね」

「ちよ、……………アンナさん怖い怖い」

アンナからは禍々しいオーラを放っていることを感じた。

「まあその方の件は置いて、今日は遊んでもいいですよ」

「え！ いいの？」

「はい。ご主人様には黙つときますので」

「やったー！」

アンナはそういつとリオルが子供のようにはしゃいだ。

「じゃあこれから遊ぼうぜ！ 何をして遊ぶ？」

「やっぱりここは大富豪をやるうZE！」

「このしゃべり方は……………アンナさん」

「何でしょうか？」

ピカチュウはアンナにいう。

「この人が指紋認証装置を壊した人です」

「そうですか。ではちよつとこっちにきてください」

「え！ 俺が何をしたんだよー助けてえ〜！」

「じゃあ無視して大富豪をやるう！」

ピカチュウ達はヒヒダルマを無視し、大富豪を楽しんだ。

「今日はありがとうね〜」

「またね〜」

「また遊びに来てよ」

ピカチュウ達はリオルが見えなくなるまで手を振った。

「じゃあはい！」

ピカチュウはロコンに手を出す。

「え、何？」

「お金くださいな」

ピカチュウはロコンに要求した。

「そんなの知らないわよ勝手に思い込まないでくれない？」

「酷い」

ピカチュウはロコンに一言言った。さらにジュペッタがピカチュウに向けて手を出した。

「え、何？」

「お金くださいな」

ジュペッタはピカチュウに同じことを言った。

「……………とほほ」

ピカチュウは後日ジュペッタにお金を払うことになった。

第4話 リオル君のお家はどこですか？（後書き）

ピカチュウ「あゝ損した〜」

ドンマイ

ピカチュウ「何が言いたいんだよ!」

そのまんま。

ピカチュウ「酷いな」

そんなこと知らん

ピカチュウ「……………」

そこで黙んなくてもいいと思うんだけど…。

今回はここまで

それでは〜

第5話 スパイ登場？（前書き）

はい！ ちょっと微妙なタイトルですが、前回よりはいいはず。

ピカチュウ「〜ですか？シリーズのことだな。ってか何だよ今回スパイ登場？って」

そのまんま。

ピカチュウ「またそれがよ前回のあとがきでも見たぞ」

それではどうぞ！

ピカチュウ「無視すんな！」

第5話 スパイ登場？

ジリリリリリリ。

目覚まし時計がなった。

ピカチュウは手でとめる。

「はあ〜朝か〜」

今日は日曜日、学校は休みなのである。ピカチュウは一階に降りて、テーブルの上にある朝食を食べ始めた。

「さて、今日は何をしようかな〜」

ピカチュウは朝食を食べながら考えた。

「あつ！ 母さんは今日仕事だから、お留守番頼むね〜」

ピカチュウのお母さんはピカチュウにそうだったので、ピカチュウは普通の声で「はい」と答え朝食を食べ続けた。食べるのは本当に遅い。

ピカチュウの家はピカチュウとピカチュウのお父さんとお母さんしかいない。

すなわち、兄弟がいないことになる。正直に言うと、ピカチュウは兄弟が欲しいと思っていた。

どっかの作者は兄弟は要らないとかいってるし、なんだろうなーと思うこともあった。

「てゆうか日曜でも仕事があるってちょっと可哀相」

ピカチュウはそう思う今日この頃を過ごしていた。

「うーん。今日はどうしようかな」

ピカチュウはひたすら考えた。しかし、やることはまったく思いつかなかった。

「しょうがないあいつのところに行こう」

ピカチュウはこれからどこかに行くようだ。窓の戸締りをよく確認し鍵を閉めて家から出た。

ピカチュウは歩いて3分くらいのところにある空き地に来た。見ると、ダンボールがあった。

ピカチュウはなんのためらいもなくそのダンボールを持ち上げた。すると中に仮面ライダーみたいな格好をしたポケモンアギルダーがいた。

「フツよく俺がここにいたのが見破れたな」

「いや、お前がそこにいるのは随分前から知ってるから！ てかい加減いる場所変えろよ！」

「……………わかった変えておく」

アギルダーがピカチュウの突っ込みで少し落ち込んだ。

アギルダーはピカチュウが小3のときに空き地で同じように隠れているところを見つかってしまい、そんなこんなで友達になってしまった。まず、なんでダンボールをあけたのかピカチュウはまったく覚えていなかった。

小3のときは暇なときはここに来てよくアギルダーと遊んでいた。しかし、中学に入ってしばらくの間行く暇がないため今日久しぶりに会った。年はピカチュウと同じ中学1年生である。今では「本当にこんなことしていいの?」と思うぐらいだ。

「それで今日は何して遊ぶの?」

「ちよ、なんで?」

「いやあ、忍者に憧れちゃって」

「憧れたってお前は伝説のスパイになるんじゃないのかよ!」

「!」

アギルダーの夢……それは伝説のスパイになることだ。それはピカチュウのこの一言で生まれた夢である。

『君はスパイになったらいいかもしれないよ。色んな所に隠れられるしさあ、ほかに色々とできそうだし』

この言葉のお陰で今のアギルダーがいるのである。

「あつ! ピカチュウだ」

そこに、ロロンとラティアスとリオルがいた。

「なんで一緒にいるの？」

ピカチュウがリオルに聞く。

「僕たちはピカチュウと遊ぼうと思って家に行ったら鍵が掛かってさー」

「それでここまでできたよ」

「「「その通りです」「」」

「何だこの不思議なテンションは」

ピカチュウは突っ込みながらも行き当たりばったりだと思った。

「それで、そっちの方……あれ？どっかいつちゃった」

「問題ね。この空き地内にポケモンが僕以外にいます。どこにいます……」

「そのダンボールの中」

「……………」

ピカチュウはリオルが波導を使ったことを忘れていた。

「頼む！ 気づかなかったことにしてくれ！ そのまんま答え合わせ」

せしちゃったらあいつが可哀相過ぎるだろ」

ピカチュウが急に土下座をした。

「やだ」

そう答えたのは以外なラティアスだった。

「なんで!」

「だって、わかってるのにわからない振りをして逆にその子がわかつちゃったときにすごいがっかりしちゃうじゃん。しかもさあ、そう思っちゃうとこんなこと二度とやらなくなっちゃうし、これを夢にしていたらできない無理だとか言っつて諦めちゃうじゃん」

「……………」

そこにいた全員が黙り込んだ。そして、1分位してロコンが口を開いた。

「そつだよね黙ってるのは悪いモンね」

「そつだね」

ラティアスの言うことに誰も反対することはなかった。

「じゃありオルがあけて」

ピカチュウがリオルを指名する。それを聞いたリオルはダンボールをあけた。中にはもちろん仮面ライダーみたいなポケモンアギルダ

ーがいた。

「フツよくわかったなこれでわかったのは二人目だ」

アギルダーがそういう。

「ごめんね。もうとっくにわかっていたんだ」

リオルがそういう。

「！……………スパイ諦めようかな」

アギルダーがそう呟く。

「ほら、いじけちゃったじゃん」

「でも、今いった方がよかったじゃん」

「……………そうかもね」

ピカチュウがそう答える。

「アギルダーたとえ今ばれちゃってもいつかきつと伝説のスパイになれるって、もっと熱くなれよおおおおおおお！」

ピカチュウが熱血漢に目覚めアギルダーに熱い心をぶつけた。

「はい！ 先生俺は絶対に諦めません！」

「よし！ そのいきだ！ あの夕日に向かっていくぞ！」

「はい！ 先生」

ピカチュウとアギルダーは夕日に向かって走っていった。

「何やってんだか」

「そうだね」

取り残された方たちは普通にピカチュウ達を止めたとき。

くてなわけでもた空き地く

「かくれんぼしようぜ！」

ピカチュウが言う。中一になってもかくれんぼやるのかと思いがながらも入らないと何が起きるのがわからなかったため仕方なく全員で入ることにした。

「じゃあピカチュウが鬼ね」

「何だよ!」

ロコンがそういっているのでピカチュウは突っ込んだが、ロコンは「よろしく」といい、隠れてしまった。

「仕方ないな。い〜ち、に〜い、さあ〜ん……………」

ピカチュウは仕方なく数を数えていった。そして長く「じゅ〜う」といい、振り返ると当たり前だが誰もいなかった。とりあえず、目の前にあるダンボールを持ち上げてみた。中に絶対にいると思うからである。

しかし、いつもならここに隠れているアギルダーがここにいなかった。じゃあどこへ行ったのだろうか?……………

↳それから10分後↳

「あつりオルみーっけ!」

「くそ、ばれた」

リオルは少し悔しそうにしていた。ほかにロコンとラティアスはもう見つかった。

「あとはアギルダーか」

そう。見つかってないのはあとアギルダーだけなのである。

「あいつどこにいったんだろうな」

ピカチュウがそういう。

「タイムアップそこまでだよ」

リオルが叫び終了の合図を出す。

このかくれんぼにはルールがあった。鬼は20分以内に全員を見つけてはいけないというルールがあった。そしてそのルールが適用されて、かくれんぼが終わったというわけなのである。

「じゃあアギルダーでておいでー」

ピカチュウが叫ぶ。すると、壁の中から突然アギルダーが出てきた。

「スパイ忍法壁隠れの術でござる」

「ちょっと待った！ お前今スパイと忍者混ぜたよな？ 何のために混ぜたの？ ねえ」

「スパイと忍者が好きだから」

「……………もついいよ」

ピカチュウはとうとうあきれてしまったようだ。

そして時間を見ると、とつくに6時を過ぎていた。

「そういえばアギルダーの家ってどこにあるの？」

ピカチュウがそういう。

「家はこっちの方にある」

アギルダーはピカチュウの家のほうを指した。

「ていうか毎日ここで一人で遊んでるの？ 友達は？」

リオルが少し控えながらも聞いた。

「いない。俺の周りに友達はいない。いるのはピカチュウと君たちだけだ」

「え！？ 何で友達がないの？」

今度はラティースとロコンが同時に聞く。

「俺がこういうことをしてるから嫌われて近寄ってこなくなった。嫌われたばかりのときははいじめに来る人がきてたから少しは退屈しのぎになった。でも、最後には誰も近寄らなくなったそして最後にはお化け扱いをされた。そしてそのころに友達になったのはピカチュウだったんだ」

「……………そうだったのか」

ピカチュウがそういう。

「アギルダー」

「何？」

ピカチュウがアギルダーを呼ぶ。すると、地面に正座し始めた。

「ごめん僕が助けられなかったんだね。友達の僕がまったく助けられなかったんだね」

そういいながらピカチュウは土下座した涙も出ていた。すると、アギルダーはピカチュウに「顔を上げなよ」といつてくれた。

「いいんだ俺はあの頃まったく夢がなかった。そしてスパイになるという夢ができたのはピカチュウのお陰だ。あの夢がなかったら今の俺はいなかったし、言ってくれなかったら俺は苦しみに毎日悩まされてたよ」

アギルダーはそういった。ピカチュウは「こんな僕を許してくれるの？」といい、アギルダーは「うん」と言った。

「感動の最中ごめんね。まず、ピカチュウ君はその件に関してはまったく関係がないと思うよー」

リオルが突っ込む。

「そんなこというなよおおおおおおおおおお！」

ピカチュウが叫んだ。

その後、ピカチュウとアギルダーは一緒に帰って行ったとき。

くそして翌日く

「今日は転入生が来るぞく」

リザードンがだるそうにそういった。

「み、皆さん始めまして。アギルダーといます。夢はスパイになることです。」

突如アギルダーが転入してきた。

「ちょっと待て。お前学校行ってないの！」

「うん！　ずっと休んでたよ」

アギルダーはさわやかにそういった。リザードンは「なんだピカチュウ知り合いか？」と欠伸をしながらそういった。

そんなこんなでまた1年4組に新しい仲間が増えたとき。

第5話 スパイ登場？（後書き）

あゝなんかジユペッタ君に似た様なキャラができちゃった……………。

ジユペッタ「大丈夫だよきつと」

うわ！ ジユペッタいつの間に

ジユペッタ「空気化の力が上がってきたかな」

そうじゃない？

ジユペッタ「うん！ そうだと思っ」

じゃあ今回はこころで

それでは

ジユペッタ「またね」

第6話 もう一人の主人公（前書き）

はい！ 今回は主人公が出ない話ですよ。

ピカチュウ「もう一人の主人公って」

簡単にいうと、サブ主人公です。

ピカチュウ「突っ込みはどうすんだ」

突っ込みキャラは無しで。

ピカチュウ「じゃあもう一回聞けど突っ込みはどうすんだ？」

さあね

ピカチュウ「……………」

ではどござー！

第6話 もう一人の主人公

キンコンカンコン……。

学校に授業終了のチャイムが鳴り響く。

「じゃあ今日はここまで」

1年6組の帰り学活のが終わった。生徒は担任であるオノノクスに向かいさよなら〜といい、教室を出て行く。

6組のポケモンにまぎれて教室を出ていく一匹のポケモンがいた。

「ねえイーブイ」

そのポケモンは全体的に茶色く、尻尾の先の部分は白いさらに頭にはとてもかわいらしい耳がついている。そのポケモンの名前はイーブイというらしい。

「何、ポッチャマ？」

その隣にいるのは色は青く、口にはくちばしがついているポケモンのペンギンである。

ポッチャマはイーブイと友達だ。

「今日は部活に行くの？」

「今日は生徒会長に呼び出されてるから」

ちなみに部活は二人とも卓球部だ。

「そっかじゃあ先に行ってるからな」

「わかった」

二人はそれぞれ分かれ、ポツチャマは体育館へイーブイは生徒会室に向かった。

（生徒会室）

イーブイはゆつくりと歩きながら生徒会室に向かっていた。ちなみに役職は庶務だ。イーブイは何故生徒会をやるうと思ったのか……。気づくと、生徒会室にいた。そして中に入る。

「会長、どうしたんですか？」

イーブイが生徒会長であるミュウツーに真剣に聞いた。

「ん、今日は生徒会で学校付近のゴミ集めの日なんだが……」

「俺一人じゃあ行きませんよ」

ミュウツーが言い終わる前にイーブイは話を断った。

入学式では、とても迫力のある生徒会長だったのだが今、ここにいるミュウツーはまるで別人のようにだらけている。

「あらあら、またイーブイ君に自分の仕事を押し付けてるんですか？」

そういうのは、生徒会書記で2年生のタブンネだ。

「もちろんだ。タブンネ」

「ちょ……もちろんって」

イーブイが少し、スコーとなりながらも言った。

「まあそれが一年の仕事でしょ？」

そういうのは会計のグレイシアだ。もちろん2年生である。

「んじゃ頑張ってー」

ミュウツーがやる気がなさそうに言った。

「何ですか！そこは全員でやるんじゃないんですか？」

イーブイが反抗する。

「皆やることがあるから」

「そんなこといったら僕だって同じですよね」

「そんなの知らん」

「知らんじゃないですよ」

そんなこんなで続けていたらあの人 came。

「あゝここは五月蠅いな」

「おっ、お前が来るとは珍しいな」

「ちょっと聞いてくださいよガブリアス先輩！」

イーブイが助けを求める相手は生徒会副会長のガブリアスだ。ミュウツーとは幼馴染であるが、ミュウツーは3年生ガブリアスは2年生である。ガブリアスとイーブイは生徒会の自己紹介で知り合った。

「ん、なんだ？」

ガブリアスはいつもはこんな感じだがそばにいてくれるだけでとてつもなく心強いしとても後輩思いである。どっかの生徒会長とは違って。

イーブイは正直、来年に生徒会に入ってくればよかったと思っている。

そしてこれがカントー私立ポケモン学園生徒会なのである。

「会長が自分の仕事を押し付けてくるんですよー」

イーブイが泣きついてきた。

「後輩は大切にしような会長」

「いや、こいつは後輩でもなんでもない」

ミュウツィはさらっと言った。

「酷い。酷すぎる」

イーブイは泣きながら走って、生徒会室から出て行った。

「ほらなこうなるから俺は止めたんだよ」

ガブリアスがミュウツィにそういう。

「わーったよ。じゃあ言ってくる」

ミュウツィはイーブイを追って生徒会室を出て行った。

「まったく、ミュウツィ先輩が最初からあんなこと言わなかったらよかったんじゃないですかね」

グレイシアがそう呟く。

「しらねえよただ、こんなこというほどイーブイに期待でも寄せてんじゃないの？」

ガブリアスがそういう。

「あゝ、だからいつもあんなことやってるんですね。『生徒会をやめてもらいたくないから』それでも今日はちょっとやりすぎちゃってましたね」

タブンネがそう考察を立てる。

「そうかも知れねえな」

ガブリアスが欠伸をしながらそう呟く。

〈体育館〉

体育館ではポツチャマが卓球の練習に励んでいた。

「よし、その調子だ」

そういうのは卓球部のキャプテンのエテボースだ。特徴として尻尾は2つに分かれている。それをうまく使うことで数多くの大会を勝つて来た強者である。

ポツチャマとイーブイはカントー学園卓球部の中でも期待のある新人だ。

「もう一回だ」

「はい！」

ポツチャマは大きく返事をした。

「あれ、イーブイ？」

ポツチャマは体育館の近くを歩いているイーブイを見かけた。

「先輩」

ポツチャマは先輩を呼ぶ。

「何だ？」

「すぐ戻ってくるんで少し開けていいですか？」

「ああ、いいが」

「ありがとうございます！」

そっつい、ポツチャマは走って体育館を出ていった。

「イーブイ！」

ポツチャマは大きな声でイーブイを呼んだ。

「……………なに？」

イーブイは小さい声で聞いた。

「どうしたんだよこんなところで」

ポツチャマはイーブイに聞く。

「それがねえ……………」

イーブイはここまでのいきさつを説明をした。

「ふーんでここまで来たよ」

「……………うん」

イーブイはまだシヨンボリとしている。

「それはイーブイが逃げているだけだよ」

「えっ……………」

「確かに先輩がそういうのは悪いと思うよ。だけど、それは『生徒会をやめてもらいたくないから』やってるだけだと僕は思うよ。ただ、今日はちょっとやりすぎちゃったようだけど」

ポツチャマはそう言った。聞いたのとほぼ同じ速さでイーブイは「じゃあもつと優しくしろよ」とおもった。

「まあそれが先輩達の優しさなんじゃないのかな？」

ポツチャマの言葉を聞くと、イーブイも「ああ」と驚きながらも理解はしたようだ。

「それが正解なら早く謝りにいかないと……………」

そういい、イーブイは走って生徒会室に戻っていった。

「さーと、部活に戻るか」

ポツチャマはそういうと、体育館に戻っていった。

↳そして生徒会室↳

「ハアハア……………会長いますか？」

イーブイは息が荒いがガブリアスに聞いた。

「んん今頃お前を探してるんじゃないやあねえの？」

ガブリアスは今にでも眠りそうな声で答えた。

「そうですかじゃあ探してきます！」

イーブイはそういうと、また走っていった。

「あいつあんな感じだったっけ？」

「さあ？ 誰かがこういうようにしたんじゃあないですか？」

タブンネがそう答えた。

「そいつがあいつの友達だったら、とてもいい奴と友達になったな。んじゃ屋上で寝てくるから」

「ちょ……………寝てくるってどついうこと!？」

「眠いから寝てくるんだよ」

ガブリアスがそう言い、眠りに屋上に向かった。

「まったくもうっ!」

しばらく経ったらグレイシアはガブリアスを追いかけた。

「……………やれやれ全く」

タブンネも仕方なくガブリアスとグレイシアを追いかけた。

く屋上く

「ミュウツー会長!」

「……………イーブイか?」

ミュウツーは入学式の時のような真剣な声でそういった。

「そうです」

イーブイもいつも声ではなく、真面目な声になっていた。

「さっきは……………悪かったな」

ミュウツーは普通に謝る。

「いや、会長のせいではありません」

イーブイがそう言つと、ミュウツーは?と首をかしげた。

「俺も先輩の言うことも聞けずにとわがままばかり言って先輩達に迷惑をかけてました。本当にすみませんでした」

イーブイはそういいながら頭を下げた。

「……………」

ミュウツーは黙った。そして少しおいて話し始めた。

「いや俺の方が悪かった。お前がそうやって思ってたことも分かってやれなくて、俺がめんどくさいと思ったなら直ぐにお前に俺の仕事を回しちゃって……………」

「会長……………」

イーブイは少し同情した。

「だけど、一つもやってないですけどね」

「……………フッフ、アハハハ！」

「な、何がおかしいんですか？」

イーブイはミュウツーに聞く。

「確かにそうだったから」

ミュウツーがそういうとイーブイも「そうですね」といった。

「なあ、イーブイ」

ミュウツーはイーブイを呼んだ。

「何ですか？」

それに対しイーブイはミュウツーに聞く。

「これからもよろしくな」

ミュウツォがそう言うと、イーブイは「はい！」と大きな声でいった。

「なんだよ、俺が出るまでもなかったじゃねえか」

ガブリアスは屋上の入口付近で隠れていた。どうやら、イーブイの手助けをする準備をしたようだ。流石後輩思いの先輩

「あつ！ いた」

「やっと追いつきましたよ」

そこに 그레이シア と タブンネ が 屋上 についた。

「げっ！」

ガブリアスは少しやばいと感じた。

「覚悟しなさいよこのサボリ副会長！」

「大丈夫ですよ。終わったあときちんと傷の手当てはしてあげますから」

タブンネは保健委員会に入っている。その中でも、手当てをするのがとても上手い。

「くそっ！ こうなったら砂嵐！」

ガブリアスは自分手を使い、砂嵐を起こした。

「グレイシアさん大丈夫ですか」

タブンネがグレイシアを気遣う。

「大丈夫に決まってるんじゃない！」

グレイシアは強気に答える。すると、突如砂嵐が収まった。そしてガブリアスが何かに縛られているように見える。どうやらミュウツールのサイコキネシスのようだ。

「放せ！」

ガブリアスはあがくが、全く離れるようすがない。

「会長ありがとうございます」

タブンネはそういい、ガブリアスに近づいていく。顔は笑顔ではあるが、彼女から何か禍々しいオーラが出ている。

「やめてくれ！」

ガブリアスがそう叫ぶ。

「ぶざけんな！ この馬鹿やるっ！」

そっぴいなながらグレイシアは吹雪をガブリアスにお見舞いする。

「ぎゅ〜〜〜」

ガブリアスの悲鳴が学校全体に響いた。

「…………大丈夫かなこの生徒会」

イーブイはこの生徒会に少し不安を感じた。

第6話 もう一人の主人公（後書き）

はい！ 第6話で4月編で最後です。

イーブイ「ええ！」

イーブイが主人公の話でその月はおしまいという感じにしたいと思います。

イーブイ「ふーん」

じゃあ次から5月編突入です！

それでは

第7話 体育祭にむけて……………（前書き）

ピカチュウ「なんじゃこりゃあ！」

サブタイトル通りです。

「体育祭って5月位だったっけ？」

知らねえ。

ピカチュウ「ですよね〜」

それではどうぞ！

第7話 体育祭にむけて……………

「これより、1年4組学級裁判を始めます」

リオルが裁判長になったようにそついで、学級裁判が始まった。

「では、被告前へ」

「やめろ！ 放せっ！」

リオルがそう言うのと、ピカチュウがジユペッタやアギルダーにつかまれ前に出された。

「僕が何をしたって言うんだよ！」

ピカチュウが裁判長であるリオルに聞く。

「何をって昨日のことを忘れたのか？」

「昨日のこと……………」

ピカチュウは考え始めた。

「ねえ何もしてないよね？」

「とぼけるな」

「とぼけてはいない！」

ピカチュウがそういうとリオルははぁとため息をついた。

「じゃあ説明をしてあげるよでは最初に被害者の証言でも聞きましょうか」

リオルはそういうと、一匹のタマザラシが出てきた。

「タマザラシさん？」

ピカチュウは首をかしげた。どうやら、このタマザラシは同じ1年4組のようだ。

「それでは証言を」

リオルに言われ、タマザラシが証言を始めた。

「昨日の昼休みのことでした。私はいつものように1年4組で過していたら急に私を上には飛ばしてしっぽか何かでお手玉のようなことをされました。」

タマザラシはそう発言した。

「僕そこまでしっぽは器用じゃないよ」

「うるさい。これ以上しゃべると、判決を下します」

「ひっっ！」

リオルがそういうと、ピカチュウは恐怖を感じた。

「……………では判決を言い渡します」

「ちょ、なんで！」

「だってひいっ！って言ったじゃん」

「そうですね」

リオルは判決を下そうとする。

「判決は……………」

リオルが判決を言い渡そうとした瞬間僕の意識は飛び、気がつく自分のベットの上がった。

「……………なんだ、夢か」

ピカチュウはそういうと大きく欠伸をし、ベッドから起き上がって一階に降りていった。

「あれは本当にただの夢だったのか……………」

ピカチュウはそう考えながら学校へ向かってあるいていく。

「ふう〜着いた」

ピカチュウは一息ついてから教室の中に入っていった。そこにはタマザラシがいた。

「あの〜、タマザラシさん」

「なんですか？」

タマザラシは聞いた。

「あの、……………ごめんなさい」

ピカチュウは謝った。それに対し、タマザラシは「なんのことですか？」と逆に聞くように答えた。

「え、……………」

ピカチュウは黙り込んでしまった。

そのとき、チャイムが学校に鳴り響いた。

「あっ！ 授業が始まっちゃうから……………」

そついい、タマザラシは自分の席に戻った。ピカチュウも仕方なく自分の席に座った。

「おーす。朝のHR始めるぞー」

リザードンがそう言いながら教室に入ってくる。

「今月の中頃に体育祭があるからな」

「ちょっと待て！日付くらい……………」

「それはまだ未定」

「なぜ!」

「校長の気分で決めてるから」

「そんなんでいいのかよ」

「それが現実」

ピカチュウがいくつも突っ込んでくるが、リザードンはあっさりとしっくみに答える。

「……………」

ピカチュウもとうとう黙ってしまった。

「んじゃあ体育祭頑張れよー一位になったらいいものが……………」

「えっ! 何それおいしいの?」

そういうのはアギルダーだ。アギルダーもようやくクラスの二員となじめたようだ。

「それはしらん」

「なんで!」

「校長の気分」

「なんか同じ言葉が出てきたんですけど」

「知らん」

ピカチュウもとうとうお手上げ状態に陥ったようだ。

「まあ楽しみにしとけ、それと、今日の学活はグラランドに出て100m走測るからな」

リザードンがそういうと、運動が嫌いな人はええ〜！とガツクリし、運動ずきの人はよっしゃあ！と大喜びをする。

「そついえばさりオルって足早いの？」

ピカチュウがリオルに聞く。

「うーん……………」

リオルは黙り込んで考えた。

「おそらくそれは人それぞれになると思う」

リオルがそういうと、ピカチュウは「それ、当たり前じゃん」とつつこんだ。

〜グラランド〜

「んじゃ、出席番号順に走るぞー」

「なんだその態度は」

ピカチュウはそういう。見る限り全くやる気のないおっさんのようになっている。

「これが俺のやり方なんだよ」

リザードンらしいと思えばリザードンらしいといえる。

「じゃあ始めるぞ」

リザードンがそういうと、アギルダーが3レーンにつき、今にでも走る感じがする。

ちなみにカントー学園のグラウンドは校長であるヤドランが中学時代、陸上部だったのでとてもなくきれいになっている。

正直、オリンピックの会場にしてもいくらの場所なのだ。

「よーい………ドン！」

それを聞いた瞬間、アギルダーはものすごいスピードで走っていた。

「早すぎるだろ！ あいつ」

ピカチュウはアギルダーを少し見直した一瞬だった。

「まあ種族値の問題かな」

リオルはそう考察する。

「おーっと、ここで種族値について説明しておくぞ！種族値とは、各ポケモンごとに決められてる能力値のことだ。例えば、アギルダーの場合ご覧のとおり素早さの種族値が非常に高い。こいつのことを作者はイッシュ最速のポケモンと呼ぶほど早いと思ってるぞちなみにこれテストにでるからな」

リザードンが説明をしているうちにアギルダーは走り終わった。

「タイムは……………10秒39!」

それを聞くと、アギルダーは悔いなしという顔をした。ほかの人は「すげえ」とか「やべえ」とか「これなら優勝は確実だ」とか言っている。

「早いな〜」

リオルもびっくりしている。

「早速いいタイムが出たな。次は……………」

こうして次々と1年4組の生徒が走っていく……………そしてピカチュウの番が回ってきた。

「よし、いくぞー!」

「よーい……………どん!」

「うおおおおおおお！」

ピカチュウは全速力で走った。

「タイムは………15秒99」

タイムはまあまあだったが、ピカチュウはそれなりに頑張ったとおもう。

「次はいよいよオルの番だ」

ピカチュウは一番見たかったようだ。

「んじゃ行くぞよーい………」

リザードンがスタートの合図を顔が思いっきり真剣になった。

「どん！」

リザードンがそういうと、すごい速度で走り始めた。

「早っ！」

ピカチュウは驚くが、アギルダーは「フツまだまだだな」と余裕の表情を見せる。すると、既にゴールしていた。

「タイムは………10秒45！」

「ああ〜」

そこに居たりオルとアギルダー以外は「惜しいなあ」と残念そうにいう。

「本当に惜しかったね」

「本当だよ」

リオルも少しがっかりしている。

そして、全員が走り終わり一番早いのはやっぱりアギルダーだった。その次にリオルが入った。ピカチュウは中間位である。

こうして、リオルたちの猛特訓への道が幕を開けたのである……………。

第7話 体育祭にむけて……………（後書き）

はい！ 7話完です。

ピカチュウ「リオル早くね？」

早いね〜僕なんて水泳だけが取り柄なのに……………。

ピカチュウ「作者がたそがれた」

じゃあそれでは〜

ピカチュウ「終わるのも早い」

第8話 もう一つの地獄（前書き）

はい！ ポケ夢の番外編が入ったのでカントー学園を更新するのも久しぶりですね。

ピカチュウ「まあそういう兼ね合いだったから仕方がないと僕は思う」

そのとおりです。

ピカチュウ「そういう言い方やめろ」

はい。

それと、今回はピカチュウ以外の視点もあります。

ピカチュウ「……………えっ！」

それではどうぞ！

第8話 もう一つの地獄

sideロコン

ここは1年4組の教室だ。いつもは教室は静かどころか大騒ぎが起きていくくらいの元気が出ているが、今は休み時間なのに1年4組から声がひとつも出ていない。そう、私は今日は一人のツッコミ王が休みだからこんな静かだと思う。

「ピカチュウ君今日は休みか」

私はリオルがそう呟くのを聞いた。今は朝の学活を終えたばかりの休み時間が始まったばかりで、私は自分の席で一時間目の授業の準備をしていたところだった。私はクラスの中で正直のところを言うと、ピカチュウがこなくていいと思う生徒と何人かクラスの中になると推測する。

「ああ、そっぴや言い忘れてたことがあった」

リザードンが教室から出ようとしたとき、また戻ってきて教卓の前に立った。

「体育祭が終わったら、中間テストがあるから勉強しておけよ」

リザードンがそっぴやと、4組にいた生徒は奇声やガツクリした声が聞こえた。

「ねえ、テストどうする？」

私はリオルに近づいて聞いた。

「うーん。リザードン先生なりに急に言ってくることは分かったけど、まさかこんなタイミングにくるとは思わなかったよ」

リオルはどうやらいつかこうなることは予想できたようだ。だけど、私の質問は普通にスルーしてる。

「こんなタイミング？」

私はそれを聞くと、首を傾げたつつリオルに聞いた。

「ツツコミ王が休みの日に言ってくると思う？」

「うん」

私は普通にそう答えるが、リオルはガクツとなった。

「先生絶対ピカチュウ君と言い合つのを楽しんでるんだと思うんだよね」

「それで？」

私はもう一回聞いたが、またもやリオルはガクツとなった。

「い、意外と鈍いんだね」

「ううん。わかってたけど、ちょっと遊んでただけ」

私はそういうと、リオルは少し馬鹿だと自覚したのかなぜか勉強を

始めた。

「よほどショックだったのね……………」

私は心の中でそう呟いた。

「それできあ、リオル君はテストどうする？」

私はリオルに聞いても、答えが帰ってこない……………。これは謝らなきゃいけないと私は思った。

「リオル君、ごめんね」

「……………いいよ」

「ありがとう！」

私はそう言うが、ここにピカチュウがいれば「ねえ、なんで謝ってるのに最後に ついてるの？ しかもそれで許しちゃってるしそれでいいのかよ！」とかもろに突っ込んできたと思った。

「それと、テストのことね。今日あたりいろんな人を呼んで、家で勉強会しない？」

「あつ、それ賛成！」

私は快く受け入れた。

「それじゃあ、いろんな人誘おうか」

「うん！」

私はそういいながら頷き、別れているんな人を誘った。

「じゃあ集合場所は、リオル君の家の前で」

「分かったそれじゃ」

（放課後）（ロコン 3人称）

「お待たせ」

ロコンはリオルの家の前に来た。

「ねえ、なんで僕までこなくちゃいけないの？ 病人だよ」

そういうのは風邪で学校を休んでいたピカチュウだ。まだ5月だといふのにマフラーをしている。

「ピカチュウは5月病だと思って」

「ちょっと、なんで5月病に掛からなきゃならないの？ これは単なる風邪だよ」

ピカチュウは5月病の存在を否定するように突っ込んだ。ピカチュウ以外にラティアス、アギルダー、ヒビダルマ、タマザラシなどがいた。

「ちょ、省かれた人かわいそうだな」

ピカチュウはまた変なところに入った。

「いらつしゃい！ とりあえず中に入ってよ」

「「「はい！」「」」

そこに居た人は大きくリオルに返事を返した。

（屋敷）

「いらつしゃいませ。今日はお友達がおおいですね」

「ごめんなさい」

リオルはアンナに謝った。

「まあ、ご主人様達は本日ホウエン地方で行われている社内オリエンテーションに参加されていますので問題はありませんが」

「ちなみにリオル君のお父さんの職業はなんですか？」

タマザラシが聞く。

「株式会社フレンドの社長ですね」

「あ、あの大会社の社長〜！」「」

まわりにいた人は叫び驚くが、一匹だけ反応がなかった。

「別に親が社長なんてどうでもいいと思う。どうせ跡継ぎが自分になるとかいつてるし」

「でも、フレンドの社長の跡継ぎはしたほうがいいと思うよ！」

ピカチュウはそういう。あれから風邪も良くはなってきたようだ。

株式会社フレンドとは、カントー地方を中心に各地方に支部を置いている大会社だ。

主に様々なポケモンのグッズを販売している。そしてなぜかバカ売れし、今では大会社として成り立っている。

「僕は自由に生きていきたいのに社長になったら自由にやっていけない」

「ちよ、そんな理由で!?!」

ピカチュウはリオルの意見を批判しつつ突っ込んだ。

「そんな理由って言うな!」

リオルは強く否定した。

「……………分かった。ごめん」

「うん」

ピカチュウはリオルに謝り、リオルはそれで許した。

「ねえ、ほかの人が空気化してるよ」

ラティアスが突如入ってきた。空気化した人はそっだそっだと思
乗した。

「あゝ！ もっつるさい」

ピカチュウはうるさいと叫び始めた。

「じゃあそろそろ勉強会でもやりますか」

「「そーですね」」

「ちよつと待て！ なんでその答え方なんだよ！」

ピカチュウは最後の最後まで突っ込んだ。

そして、そこに居たメンバーだけではなく1年の全員はまだ知らな
かった。

カントー市立ポケモン学園の定期テストの本当の恐怖を……………。

そしてそれを知るのはテスト前日のことである。

第8話 もう一つの地獄（後書き）

はい！ 今回は空気キャラが多いですね。

ピカチュウ「キャラ配分が全く出来てなかったな」

下手したらキャラ崩壊ww

ピカチュウ「おい！ そこで笑うな！」

今回はおしまいっ！

ピカチュウ「勝手に終わらせるな！」

第9話 体育祭2週間前（前書き）

はい！ 第9話です。

ピカチュウ「番外編みたいなのも早く出してくれ〜」

とりあえず、出来れば今年中には行きたいと思います。

それと、今回はかなりの視点変化があります。

それではどうぞ！

第9話 体育祭2週間前

ここはいつもは平和な1年4組。しかし、その1年4組でさえ皆体育祭やらテストやら色々と忙しそうにしている。そしてそこにリザードンが入ってきた。

「おーす！ みんな来てるか」

「先生、適當さもいい加減にしてくれないですか？」

そう聞くのはリオルだ。いつもだったらピカチュウが突っ込むはずだが、先に突っ込まれたようだ。

「これが適當か？」

「適當でしょ！ これは確実に」

今度こそピカチュウが突っ込んだ。

「じゃあ普通にやってもらいたいか？」

リザードンが4組の生徒に聞くとみんなほぼ一斉に「はい！」と大きく言った。

「じゃあ真面目にやるぞー」

「いや、この人絶対に真面目にやらねえ」

ピカチュウは騙されていると思った。

「皆さん、おはようございまーす！」

リザードンからその言葉を聞いた瞬間4組にいた人ほとんどが固まった。余りにもあつていなかったからだ。

「ほらな。こうなるから、俺は嫌いなんだよ」

リザードンは嫌々やったようだ。

「せ、先生……ごめんなさい」

リオルはまだ少しひいてるがリザードンに謝った。

「ああ………いいぞ」

リザードンも普通に許した。

「それと、遅れたが体育祭の日程が決まったぞ」

それを聞くと、ピカチュウをはじめほとんどの人は「ようやくかよっ！」と突っ込んだ。

「体育祭は2週間後にやるから、それまできちんと走るなりなんなりしておけよ。じゃあ、朝のHRは終わりだ」

そっつい、リザードンは教室を出ていった。

「さて、4組は優勝できるかな」

ピカチュウは体を伸ばしながらリオルに聞く。

「大丈夫だと思う。まず、アギルダーがいるし団結力もそこそこいいから最下位にはならないと思う」

リオルはピカチュウにそっくりながら1時間目の授業の準備をしている。

「本当に大丈夫かな」

それでも、ピカチュウは少し心配だった。

たとえ個人成績がよくても、団結力がそこそこいいぐらいでいいのか？ 本当は全員が一致団結をしてやるのが一番いいんじゃないのか……。ピカチュウはそう考え始めた。そして考えるひまもなくチャイムが鳴り、1時間目に入るのだった。

〈1年6組〉

時間は1時間目が始まる前に遡る。ここは1年6組。1年4組ほど賑やかではないが、それでもとてもいいクラスだ。そして、ここには生徒会庶務のあのポケモンもいる。

「イーブイ」

「ん、何？」

ミジユマルが声をかけた。その先にいるのは生徒会庶務であるイー

ブイだ。

「体育祭まであと2週間だけど、体育祭で勝てると思うっ?」

ミジュマルはイーブイにそう聞く。

「……………さあ?」

「さあって……………」

ミジュマルはイーブイの答えを聞いて少し驚いた。

「だってそうじゃん。どこが強いなんてわからないじゃん! そんなこと俺に聞かれても、わからないものはわからない」

イーブイの言っていることは正確だった。

「じゃあ、イーブイはどこが優勝すると思うっ?」

ミジュマルはまたイーブイに聞いた。

「うーん……………勝って欲しいのはやっぱり6組がいいんだけど」

「いいけど?」

ミジュマルはイーブイの答えを聞いて首を傾げた。

「俺の予想は4組かな」

「なんで?」

「またもやミジユマルは聞く。」

「うーん……………やっぱり4組にあいつがいるからでいいのかなあ」

「あいつ?」

「ああ、俺の……………親友さ」

イーブイはそういい、時間を確認した。もう少してチャイムが鳴りそうなので、1時間目の準備をし始めた。

「ふーん……………」

ミジユマルもそう頷き、自分の席に戻って1時間目の授業の準備をし始めた。

「1年4組」

4組の1時間目はポケ学だ。リザードンが教室の中に入ってきた。

「オース！ 授業を始めるぞ」

リザードンはそういうが、生徒はまだ少し普通に話せるところまで戻ってないようだ。

「なあ、そろそろひくのやめてくれ。こっちの精神が持たなくなる」

リザードンは地味に心に響いていたようだ。

「わかりましたから、早く授業を始めてください」

「リオル、なんでキレ気味なの？」

ピカチュウは少し起こっているリオルの態度に少し怯みながらも突っ込んだ。

「だってどんどん時間がすぎていくんだもん」

「じゃあ、ひくのはやめてくれ」

「はい」

リオルはリザードンと約束をした。

「んじゃ、始めるぞ〜。今日は努力値についてだぞ〜。教科書23ページを開け〜」

リザードンはいつものようにだらけきった感じで授業を進めていく。

「じゃあピカチュウ。ビッパを倒したら、どの努力値が手に入る？」

「うーん……」

ピカチュウは考えている途中にリオルの方をむいた。すると、ノートの端にHPと書いてあった。

「答えはHPです」

「おお、正解だ。さてはリオルからこっそり答え聞いただろう」

「そ、そんなことないですよ」

リザードンはつくづく勘がいい。ピカチュウは窓の方をむきながら答えた。

「分かった。じゃあ、ヒトモシを倒したら特功に努力値が入るがいくつ入る？」

「うーん……」

ピカチュウはまた考えた。そしてまたリオルの方をむいて答えを出してもらおうとしたが、リザードンがリオルを諸に見ている。どうやら、リオルは答えをピカチュウに教えることができない。

「ここは勘で1だ！」

「ほう。ファイナルアンサーか？」

「なんでどっかのクイズ番組みたいになってんの？」

リザードンは答えを聞いたのにピカチュウから返ってきたのはツツ

「コミだった。」

「でも、これでファイナルアンサーだ！」

そしてピカチュウから答えが返ってきた。

「……………くっ！ 正解だ」

「やったー！ ……って、地味に悔しがるなよそれでも教師だろ」

ピカチュウは喜びながらもリザードンに突っ込んだ。これにはリザードンは答えることができずに黙っていた。

「ついに勝ったぜ！」

「お前も喜ぶなよ……………」

リザードンは少し汗をかきながらもツツコミを入れた。そしてチャイムもほぼ同時になった。

「そ、それじゃあ今日は終わりだ」

「気を付け！ 礼！ ありがとうございます」

担当の生徒が号令をかけ、それと同時に生徒は頭を下げた。

「んじゃ、このあとも頑張れよ」

そういい、リザードンは教室を出ていった。

（1年6組）

6組の1時間目は社会だ。今は歴史を勉強している。社会で歴者は主に日本の歴史をやる。ポケモンの歴史はポケ学でやるためだ。ちなみに担当の教師はユンゲラーだ。担任のクラスはない。

「じゃあ、ミジユマル。1853年に神奈川の浦賀に来航した人物は？」

ユンゲラーは寝かけているミジユマルを指した。

そもそも、ユンゲラーの授業はとてつもなく眠い。ユンゲラーが催眠術でもかけてんじゃないのかというぐらいに眠い。

「……ペリカンです」

「はあ！？ ペリカンがそのときに日本にいたのか？ 正解はペリカンだ！ 地味に変な間違いをするな」

「ぐう……………」

「そして寝るな！」

ユンゲラーはミジユマルが寝かけていることを注意した。

「じゃあ、イーブイ。1854年にペリーは日本にもう一度来航した。その時に結んだ条約は？」

「……日米和親条約です」

「そのとおりだ良く出来たな。それに対し、ミジユマルはもう少しちゃんとやれ！」

「……………ぐう」

ユンゲラーはイーブイを褒め、ミジユマルを注意した。しかし、ミジユマルはまだ眠っている。

「まだ寝てるのか！」

ユンゲラーはあっさりとしたツッコミをした。

「んじゃ、ペリーが来航したときに乗っていた船の色はなんだミジユマル！」

ミジユマルはまだ寝ている。

「ぐう……………黒です」

「あのなあ……………寝ながら正解を当ててるなよ」

ユンゲラーは呆れながら、突っ込んだ。

「んじゃ、次の問題……………」

続けようとしたときにチャイムが鳴った。

「んじゃ、ミジユマルは後で職員室の前に来いよ。分かったか」

「……………」

「もう……………突っ込ませないでくれ」

ユンゲラーは最後の最後まで呆れた。

〈放課後〉

〈1年4組〉

4組の生徒は体育祭の練習をするためにグラウンドに集まっていた。陸上部は今日は校長の気分で休みのようだ。

「じゃあまず、リレーの選手を決めよう」

そう提案するのはリオルだ。

「そうだな」

ピカチュウもその案には賛成のようだ。

「リレーは各クラス6人を選出して、順番にこのグラウンドを一周して次に人に渡すというものだが、アンカーは2週走るらしい」

「とりあえず、順番は後で決めるとして出る人はアギルダー、リオル当たりは決まってるな」

ピカチュウはそういう。

「あと4人か」

「リザードン先生から前にとった100メートル走の記録を貰いに行こう」

「そうだな」

リオルの案にまたもやピカチュウが賛成する。

「さっきからピカチュウしか言っていないよね……………」

リオルが地味に突っ込んだ。

「それ以外は皆オツケーってことだよ」

そういうのはラティアスだ。

「そういえばラティアスもはやかかったよね」

ピカチュウはラティアスに聞く。

「まあ伝説のポケモンだからかなあ」

「ですよね〜」

ピカチュウはあっさりと言葉を返された。

「おい。メモをもってきたよ〜」

そういうのはリオルだ。走りながら近づいてくる。

「早速見よう」

1年4組の皆は全員でメモを見る。

「あっ！」

リオルが突如叫ぶ。そこにはイーブイとミジュマルがいる。どつちから帰宅途中のようだ。

「やあ、リオル」

イーブイはリオルに声をかける。

「イーブイ、久しぶりだね」

リオルが君付けなしでイーブイを呼んだ。

「体育祭は優勝できそうなの？」

「うん。そこそこ」

「まあ、お互い悔いの残らないように頑張ろう」

「うん。こっちも負けないからね」

リオルは頷き、そして目で火花が散るような感じになっている。

「僕は、ミジュマル。君が噂のシッコウ王君？」

「ちよ、噂になるまでまわってるの」

「うん。かなり出回ってるよ」

ミジュマルは頷き、そういう。

「……………」

その時にピカチュウは少しの間、固まった。

「じゃあね、リオル」

「またね。イーブイ」

ミジュマルとイーブイは自分の家に帰っていった。

「よし、この調子で頑張っていこう」

「「「おおー!」「」」

こうして、4組の体育祭に向けて着々と進んでいった。

く帰り道く

「どうだった？ 久しぶりのリオル君は？」

ミジュマルがイーブイに聞いた。

「やっぱり、変わってなかったな。やっぱり、あいつはいつまでも俺のベストフレンドだな」

イーブイはそう言いながら空を見上げる。真っ赤な夕焼けが綺麗にイーブイの目に入っていく。

「体育祭が楽しみだなあ」

イーブイはそう言いながら、顔を前に戻しゆっくりと帰っていった。

第9話 体育祭2週間前（後書き）

はい！ 今回はとても長くかけました。

ピカチュウ「先生がまさかのツッコミ……………」

まあ、今後そういうキャラになるから。

ピカチュウ「キャラがかぶってるし、リオルとイーブイの関係も気になるし、色々あるな〜」

まあそれがこの作品ですよ。

ピカチュウ「本当かよ」

それでは〜

第10話 学園の科学者とタイムスリップ（前書き）

はい！ カントー学園も10話目突破です。

ピカチュウ「ようやくかと思う一面もある」

まあ、2週間に一回更新ですしね。

ピカチュウ「だな」

それではどうぞ！

第10話 学園の科学者とタイムスリップ

〈放課後〉

「……………開発部に来て欲しい？」

突如、どこかでそんな声がした。その声が聞こえたのは1年4組の教室だ。

そしてその声の主は……………。

「なんでいかなきゃいけないの？」

ピカチュウだ。そして、それを頼んでいるのは……………。

「だから、その理由は色々あつて言えないんだZE！」

ヒビダルマだ。どうやら開発部に来て欲しいとたんでいるようだ。

「なあ、頼むからそのZE！をやめてくれ。聞いてるほうがむかつく」

「そ、それは出来ないZE！ これがないと、俺のキャラが成り立たねえんだZE！」

ピカチュウはヒビダルマの口癖をつざがっている。

「ていうか、俺が呼んでるんじゃないやなくて先輩が読んでるんだZE！」

「それを早く言えよ。……ていうか、僕悪いことした？」

ピカチュウはヒビダルマに突っ込みながら疑問をもった。

「何故か人が多くいるらしいんだＺＥ！」

「待て。そういうことは理由は知らないと言ってるのと同じだよな。それとも、それで理由になると思ってたのか？」

「やっぱり、突っ込んできたＺＥ！」

ヒビダルマも突っ込んでくることは分かっていたようである。

「じゃあいいけどその代わりに今日一日、そのＺＥ！をやめろ。それでいいよ」

「わ、分かったぜ！」

ヒビダルマは戸惑いながらも口癖をやめた。

「それじゃ、案内するぜ」

「つと、その前に僕以外もやばないとね……」

ヒビダルマが案内しようとした瞬間にピカチュウは自分一人がいいのかと思いきほかの人に尋ね、大急ぎで集めた。

（第2理科室）

「ここが、科学部の部室……………」

ピカチュウがそう呟く。

「ていうか、ラスボスを倒しにでも行く雰囲気にしないでよ……………」

ピカチュウの後ろにいたりオルが突っ込んだ。

「キャラ崩壊が起きるから、そういうことしないほうがいいよ」

そういうのはロコンだ。彼女は面白そうだったからと付いてきた。

「ちょ、メタ発言スレスレな気が……………」

ピカチュウはロコンが言ったことに突っ込んだ。

「それはどうでもよくて、早く中に入るうよ」

ラティアスは今すぐにでも入りたいううだ。

「それじゃあ、中に入るぜ」

「あっ！ Z E！が無くなってー！」

ロコンがヒダルマの口癖がないことに築いた。

「ここにくるための条件で今日はZ E！をつけないようにさせた」

ピカチュウがそういうと、ロコンは「へえ」と驚いた。

「先輩、俺の友達を呼んできましたよ」

「……………」

ヒビダルマがよんでも、何も反応がない。

「先輩〜！」

「……………」

もう一度よんでも、同じように反応がない。

「ヨノワール先輩〜！」

「……………」

3度よんだが、まだ反応がない。

「居ないんじゃないの？」

ラティアスがヒビダルマにそう聞く。

「いや、いるにはいるが開発に集中しすぎて聞こえてないんだと思う」

ヒビダルマは普通に答える。

「しょうがない。あれをするか……」

ヒビダルマがそうつぶやくと、ヨノワールの前に移動した。そして

……

「ヨノワール先輩！ 早く返事くれないと、ここにあるもの全部処分してきますよ」

「待つんだ。あと少しで、新しい機械が完成しそうなのだ。それで、あれをこうして……」

ヒビダルマがそういうと、ヨノワールは手を動かしながらヒビダルマにそういう。

「例の実験の実験台を持ってきましたよ」

「おお。ようやくあの実験ができるぞー！」

「……………実験？」

ピカチュウを始めそこに居た人の殆どが首を傾げた。

「言ってなかったか？ これから、君たちには実験台になってもらう」

「実験台ね……………ってえええええ！」

ピカチュウたちは驚きを隠せなかった。なんだって、自分たちが実験台になるというのだ。

「ああ、大丈夫。ほんの少し前に戻ってもらおうくらいだから」

「……………それってどういうことですか？」

ヨノワールは微笑みながらそう言うが、ピカチュウたちはさっぱりわからなかった。

「何って、時の移動だよ。まあ、かなり昔の時代に行けとは言わな
いから安心して実験台になってくれるかな」

「と、時の移動……!!!!」

ピカチュウたちはさっきから驚いてばかりである。まあ、話が急
すぎるといのも理由の一つである。

「それじゃあ、頑張ってもらおうか」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「ん、何かね？」

ヨノワールに声をかけたのはリオルだ。

「正確にどれぐらいの時の移動するんですか？」

「うーんと……………1時間前だね。1時間前に戻れば機械が正常に動
いていることがわかるからね」

「なんでですか？」

リオルはヨノワールに続けて聞く。

「それは開発部の秘密ということで」

「安全とは限らないじゃないですか！」

ピカチュウはヨノワールに突っ込んだ。

「当たり前だよ。なんたって実験段階だからねえ」

「な、なんてのんきな……」

ロコンはヨノワールの性格に少し驚いてる。

「それじゃあ、行ってみよー………ってこれじゃあ、ちょっと人数が多いなあ」

「えっ、何人ぐらいいるんですか？」

ラティアスが聞く。

「えーっと、3人ぐらいでよかったんじゃないかなあ」

ヨノワールは頭を手でかきながらそう言った。

「それじゃあ、僕とピカチュウとロコンでいいんじゃない？」

「うん。僕もそれでいいよ」

「私もいいよ」

リオルの出した意見に賛成した二人が行くことになった。

「じゃあ、ヒヒダルマ」

「はい！ 今すぐ準備します」

ヒヒダルマは走って準備室の方へ向かった。

ちなみにこの理科室は授業では使わない。理由はただ単に開発部が実験道具などをしまっているからである。

そう説明している間に準備が完了した。

「よし、準備はいいね？」

「「「はい！」「」」

「3人ともいい返事だ！」

ヨノワールはそういうと、手間にあるレバーを前に倒した。すると、装置全体に電流が流れ始した。

「うおおおおおおお！」

「うわあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

そして3人は悲鳴と共に過去に飛んでいった。

「……………行っちゃった」

ラティアスはそう呟いた。

く???く???

「……うーんここは……」

ピカチュウは目が覚めると周りを見渡した。すると、そばにリオルとロコンがいた。ピカチュウは近くにより、リオルとロコンを揺らした。そしてすぐに二人とも直ぐに立ち上がった。

「う、うーん……ここは……」

「……………どうやら1時間前みたいだね」

「そうみたいだね」

ピカチュウはそういつ。

「おい聞こえる?」

突如、空から声がした。

「その声は、ヨノワール先輩!」

「よし、聞こえるな。じゃあ、これから君たちにしてもらいたいのは時間の確認だ。今、こっちは3時だがそっちは何時だ?」

「えっと……………2時です!」

ヨノワールに言われたとおりにピカチュウは答えた。

「よし! 時間軸は合ってるな。次に周りのポケモンは動いてるか?」

「……………あっはい! しっかり動いています」

今度はリオルが答える。

「よし! 最後は……………」

「あのく、どうやったら現在に戻れるんですか?」

そう聞くのはロコンだ。

「今からそれチェックする」

「それじゃダメでしょ!」

ピカチュウは先輩相手にため口で突っ込んだ。

「……………」

どうやら今は調べていて聞いてなかったようだ。

「これから1時間そこで滞在してくれ。そうすれば、エネルギーがたまってもとに戻れるただし…」

「ただし……………」

3人はごくりと息を呑む。

「未来が変わるようなことだけは絶対にダメだ。そうすると戻れない可能性がある。そして、まわりには君たちは見えてないから気をつけるよ」

「は、はい！ わかりました」

ピカチュウはヨノワールに伝える。

「それじゃあ、1時間後またここにきてくれ」

「はい…」

そう返事をする、声が聞こえなくなった。

「ちて、じいじいするか……………」

ピカチュウは考え始めた。

「じゃあ、僕たちのことみに行こうよ」

「いいね。そうしよう」

ロコンは賛成した。

「うーん……それ以外にやることないしそうするか」

ピカチュウも賛成した。

「つとあ、早速ピカチュウ発見！」

リオルは過去のピカチュウを見つけたようだ。

「なにもするなよ。絶対にな」

「わ、わかってるよ」

リオルは何かしようとしていたが、ピカチュウに止められた。

「ん……なにかしてるぞ」

「え、なにになに？」

ピカチュウたちは過去のピカチュウを見た。すると、急にバナナの皮を踏み滑った。

「何やってるの！ 過去の僕」

「あはははは！」

「あーおかしい」

二人ともその姿を見て笑っている。

「わ、笑うなよ！」

ピカチュウはリオルたちに怒った。

「ご、ごめんごめん。別に面白かったから笑ったんだよ」

「そ、そうよ」

リオルとロコンは必死にごまかしている。

「本当に？」

「うん」

リオルはうなずきながらそういった。

「……………許す」

「へ？……………」

「なんで許すの？」

ロコンはピカチュウに聞く。

「……………秘密」

「ピカチュウってそういうキャラだったけ……………」

「うるさい！」

「わっ！ 怒った」

「ったくもう」

ピカチュウたちはそのあといろんなところを回った。そして、1時間経った。

「それじゃあ、戻すぞ」

「お願いします！」

「ほいつ！」

ヨノワールはそういうと、レバーを手前に引いた。

すると、3人は過去の世界から姿を消した。そして気が付いたら、現代の世界に戻っていた。

「お疲れ。これで実験は終わりだよ。もう帰っていいから」

「……………あっ！ はい」

ピカチュウはそういい、理科室を出ていった。

〈帰り道〉

「それでねえ、過去のピカチュウがね……」

「それは言うなあ〜！」

ロコンが言おうと瞬間、ピカチュウが止めた。

「大丈夫。それはもう言わないから」

「本当にね？」

「もちろん」

リオルとロコンはピカチュウにそういった。

「……………わかった信じるよ」

ピカチュウはこの話を信じた。

「それにしても、あたしも行きたかったなあ〜」

「しょうがないよ。人数の問題もあったし」

「そうだね」

ラティアスも行きたかったようだ。

「それにしても、ヨノワール先輩って実験してる時と普段はかなり別人にみえましたね」

「まあ、話し方がちがったからね。そこからわかることだよね」

「うん」

ラティアスはこくりとうなずいた。

そして、その日は5人で一緒に帰っていった。

第10話 学園の科学者とタイムスリップ（後書き）

はい！ 第10話完了です。

ピカチュウ「ヨノワール先輩今後でそうだな」

まあ、今後君たちは彼にいろいろとお世話になりますからね。

ピカチュウ「それ、半分ネタバレ」

……………それでは

ピカチュウ「逃げるなよ（汗）」

第11話 体育祭前日（前書き）

はい！ カントー学園もまだ、更新しますよ！

ピカチュウ「なんでそんなテンション高いの」

まあ、いろいろある。

ピカチュウ「あっそ」

それではどうぞ！

第11話 体育祭前日

「明日は体育祭です。クラス全員で協力し合って楽しく、そして優勝できるように全力を尽くす予定です」

副校長のペルシアンはそういう。

今日は臨時の全校集会があった。理由は明日が体育祭のためだ。それにしても相変わらずです、さまざまうるさいな。

「では次に校長先生の話です」

ペルシアンがそういうと、教壇から降りていく。そしてかわりにヤドランが上がっていく。

「……………」

しかし、話を始める気配がまったくない。

「校長、これを」

入学式のようにペルシアンが教壇に上がり、一枚の紙を渡す。

「えー、ペルシアン先生が言っていた通り明日は体育祭なので今日は体を休めてもらいたい。てなわけで、今日は全部活休みにしたいと思う」

「……………」

それを聞いた生徒たちはしばらく固まった。そして、大きな声でやったあゝと叫ぶ人や遊ぶ約束をしたりする人がはじめ体育館はざわめき始めた。

「校長、そんな勝手なことってはまずいと思つてます」

「大丈夫じゃ。体育祭で浮かれてその後何があるか忘れてはるはずじゃ」

「……なるほどです。さすがは校長です」

ペルシアンは納得する。どうやらヤドランは何かを企んでいるようだ。

「じゃあ、これで終わらせようかの」

「そうですかね」

ペルシアンはまた納得した。

「静かにしますね！ これで集会を終わります。3年生から自分たちの教室にもどります」

ペルシアンの話が終わると、生徒たちはそれぞれのクラスに戻っていった。

「1年4組」

「ついに明日か」

ピカチュウはそう呟く。

「そういえば、出る種目を全く決めてないよ」

「……あっ……」

リオルがそう言つと周りは固まった。

「どうすんの！？ もうほとんど時間がないよ」

ピカチュウは焦っている。

「大丈夫。僕が事前に考えてきた」

「流石はリオル君」

ラティースは褒めた。

「ピカチュウ君ももう焦んなくていいよ」

リオルは焦っている。ピカチュウに声をかける。

「えーっと、まず、徒競走はこうして、リレーはこうして……」

しかし、リオルの声はピカチュウに全く届いていない。

「……しばらく置いておこうか」

「そうだね」

「うん……ってジュペッタ君いつの間に!？」

リオルの隣にいつの間にかジュペッタがいた。

「いままで部活で散々頑張ってきたからね」

「へ、へえ……そうなんだ」

リオルは頭の中でどうやってたら空気化出来のかと思った。

「んで玉入れはこうやって……」

「……まだやってるよ」

「意外と焦ったら止まらないタイプなんじゃないのかな」

「そうだと思うよってどうか確実に」

リオルはハッキリといった。

「それよりも、今月の行事って体育祭だけだっけ……………」

リオルは考え出した。

「……………あっ！」

「なにか、思い出したの？」

ジュペッタはリオルに聞く。

「う、うん……………ちょっとね」

リオルは何かを思い出し、動揺している。

「……………ここは、このことを話さずにしっかりと一人で勉強しておこう」

リオルに悪知恵が働いた。

「……………できたー！」

その声の主はピカチュウだ。どうやら出場表ができたようだ。

「ピカチュウ、君の努力は無駄だよ」

「えっ……………」

「僕の持っている出場表は皆の意見でほとんど出来ている。それに

対し、君のは一人で考えたものじゃないか」

「そ、それがどうしたんだよ」

「二人ともいいキャラ出してゐるねえ」

ジュペッタはそう呟く。ジュペッタの趣味はドラマ鑑賞らしい。

「どう考えてもみんなで考えた出場表の方がいいに決まってるよね」

「……………うん」

「ピカチュウ君がとてもいいよ。もしかしたら俳優になれんじゃないのかな」

ジュペッタは脇でまるで監督のような感じでピカチュウとリオルを見ていた。

「ただ単に無邪気なだけじゃないの？」

そのジュペッタの脇でロコンは毒舌であった。

「んじゃ僕のやつを出すよ」

「……………わかった」

ピカチュウはあっさり了解した。

「これでめでたしめでたし」

「くだらない話だったね」

「そのとおりだね」

ジユペッタは拍手をしている。それに対し、ロコンはラティアスと話した。

「お笑い部」

「部活動対抗リレー？ なんですかそれ」

ピカチュウは首をかしげマツギヨに聞く。

「ただ単に部活動でチームになってリレーをするという競技がある」

「でも、そんな競技プログラムに載ってないですよね」

ピカチュウはそうマツギヨに返す。

「たしかにそうだが、途中で休憩とその次の種目で10分くらいあいてるだろ？」

「そうですね」

ピカチュウはプログラムを確認して頷いた。

「そこでこの競技をやるんだ。なんで空いてるのはかミスかもしくは校長の気分か……………」

「気分で決めるのまた出てきたよ！ 本当にそれでいいのかこの学校」

ピカチュウはツツコミをいれた。

「まあ、それはともかくピカチュウにはリレーに出てもらいたい」

「へえ〜僕がリレーか……………つてええええええええええ！」

ピカチュウはそれを聞いてしばらくしてから驚いた。

「僕遅い方ですよ！」

「大丈夫。うちにはテッカニンが居るし」

「……………要するに人数の問題ですよね」

「その通りデース」

すると、マツギヨの横からはちみたいなポケモンテッカニンが飛んできた。

「なんでテツカニン先輩カタカナ混じってるんですか!？」

「キャラづくりのためデース。でも一応ヨーロッパ出身デース」

「ヨーロッパってどこなんですか！ 人間界の地名言われてもわかりませんよ」

「そうですねー」

「そうですねっていわれても……」

「とりあえず、生息地不明にしておいてくだサーイ」

「……もう言うことがありません」

ピカチュウは突っ込むのが疲れたので突っ込むのをやめた。

「それじゃ、あと、順番は適当に……」

「それでいいの!？」

ピカチュウは微妙なところに突っ込んだ。

そして、体育祭当日……

第11話 体育祭前日（後書き）

はい！ 遅れて申し訳ございませんでしたm）——（ m

ピカチュウ「まあ毎日更新だから今回は許す」

やっふう〜！

ピカチュウ「どこぞのケ 軍曹」

それでは〜

ピカチュウ「いつものように無視かよ……………」

第12話 体育祭で大白熱！？ ～前編～（前書き）

はい！ 5月編の山場の体育祭です。

ピカチュウ「そっちは新年でこっちは5月って……………」

いろんな問題があると僕は思う。

ピカチュウ「思いつて……………」

それではどうぞ！

第12話 体育祭で大白熱！？ ～前編～

今日、カントー市立ポケモン学園は熱気でいっぱいだった。なぜなら、今日は待ちに待った体育祭なのだからだ。そして、1年4組の教室では……………。

「おゝい。みんな準備は出来てるな？」

「……………はい！……！」

リザードンは4組の生徒に確認をとった。それに合わせて、4組全員の声が大きくそしてハッキリと聞こえた。

「よしっ！ じゃ、行くぞ～。俺の給料の為に」

「……………なんでそうなるんだよっ！……！」

今のリザードンの発言にピカチュウだけではなく4組のほとんどが突っ込んだ。

（グラウンド）

「これよりカントー市立ポケモン学園主催体育祭を始めます。まずは、実行委員長からの話します」

ペルシアンは朝礼台の上でマイクを使い司会をしている。そして、実行委員長であるミュウツーが朝礼台に上がる。

この学校では体育祭などの行事の実行委員は大体が生徒会が行なっている。これはもちろんヤドランが言い始めたのがきっかけである。

「えー皆さん、おはようございます。実行委員長のミュウツーです。これから体育祭が始まるのですが、1年生はカントー市立ポケモン学園に入ってからのはじめての体育祭になります。緊張しているかもしれませんが全力でやれるように頑張ってください。3年生は今年で最後の体育祭です。悔いが残らないよう全力でやり、体育祭を盛り上げましょう!!」

ミュウツーがマイクでそういうと3年生は大声で叫び気合を入れた。

「あれがずっと続けばいい会長なんだけどなあ〜」

6組の方に並んでいたイーブイはそう呟いた。

「こほん。次は校長先生の話します」

ペルシアンがそう言うと、いつものように朝礼台に上がる。

「……とにかく頑張るのじゃー！」

「……」

周りの空気がしばらく沈黙に陥った。

「……わしの言葉は以上じゃ」

それを聞いた瞬間聞いていた生徒ほとんどがズコーと倒れ込んだ。

(……ほれ早くいつもの紙をくれないかのお)

ヤドランは心の中で話を書いてある紙をペルシアンに要求する。

「……次は体育祭のルール説明します」

ペルシアンは早々と次の話の項目の説明にはいるうとしている。

(……はて？ 今日は何故くれないのかのお)

ヤドランは仕方なく、朝礼台から降りた。

「いつもだったら、ここでペルシアン先生が入って校長先生に話の内容が書いてある紙を渡すのになんで今日に限って渡さないんだろ
う……」

ピカチュウはこのことを頭の中で考え始めた。そして、朝礼台の上にはミュウツーの代わりなのかその役だったか知らないがイーブイが立っていた。

「えっと、ルール説明をします。今年の体育祭は各学年クラス別で競い合ってもらいます。各種目それぞれ獲得点数が決まっております、その点数を多くとったクラスの優勝です。また、不明点があればお近くの生徒会にお気軽に声をおかけください」

「要するに、1年は1年同士で戦ってことだな」

ピカチュウは話を聞いてそう呟く。

「ていうかまだ終わらないの」

あくびをしながらロコンはそういう。

「（……………あゝ緊張した〜）」

イーブイは言い終わると心の中でそう思いながら朝礼台を降りていった。

「では、今から競技に入ります」

「ようやく終わるのか〜」

ピカチュウは体を伸ばしながらそう呟く。そして、1年生をはじめ次々と熱が入っていったが一番熱が入っていたのは仕事をしていない3年生だった。

こうして体育祭と言う戦いが幕を切って落とされたのである……………。

「最初の種目は準備体操です。体操できるように前後左右に広がるぞます」

「……………」

ピカチュウはそれを聞いて固まっている。運動は嫌いっていうわけではないのだが、何よりも早く座りたかったようだ。

「…………… やっぱりまだ、終わってなかったようだね」

それを見たりオルが固まっているピカチュウにそつと呟く。

「それでは始めるぞます」

ペルシアンの言葉と同時に朝礼台の近くにあるラジオからピアノの音が流れ始めた。音楽は人間界にあるラ○オ体操と似ているようだが少し違う音楽だ。

そして、体操の順番ややり方などその他細かいところも違っているようだ。

（10分後）

「これで、準備体操を終わるぞます。では、残りは放送委員の係の人に進行してもらつぞます」

ペルシアンはそういふと、マイクを進行係に渡して朝礼台からおりた。

そして、全校生徒のほとんどは後ろを振り返り観客席へと戻つていった。

「……………えーでは、ここからの進行係を1年3組放送委員のプラスルと」

「同じく1年3組マイナスが」

「お送りいたしまーす」

進行係をしているのは見た目はウサギなのだが、耳や尻尾が赤くな

っているのがプラスル。そして、同じく見た目はつさぎなのだが、耳や尻尾が青くなっているのがマイナンである。

何故、進行係が1年なのかは今の3年生は生徒会長をはじめほとんどの委員長がだらけきっているのだ。なので、今回自分がやる仕事を全部1、2年に押し付けている。そして、本気を出すタイミンクなど世界の滅亡が起きるときぐらいでもないと思おうとはしないだろう。それに対し、全体的に真面目な2年生が本来3年生がやるべき仕事を全員で協力して対処している。そして、1年生は2年生をフォローしつつ2年生の仕事を1年生がやっている。

「さて、最初の競技は皆が大好きな」

「障害物競走です」

「えっ、いきなり障害物競走!？」

プログラムを司会であるプラスル……そして、マイナンの順に読み上げた。それを聞いたピカチュウは普通に驚く。

去年まではここに応援合戦が入っていたのだが、仕事をサボったりしている3年生は当たり前のように団長が出てこなかったので中止にしたようだ。

「選手の方は速やかに入場門に集まってくださいーい」

プラスルはマイクに向かってそう言った。

「ねえ、ピカチュウ」

「何、ロコン？」

ピカチュウはロコンに声をかけられた。

「正直のところ、あの二人に憎んでるでしょ？」

「……………なんで分かったの？」

「性別は別としてタイプと見た目から考えてピカチュウに似ている感じがするし、なにか同じオーラを出してるような気がするから……」

ロコンは自分の推理をピカチュウに言った。

「……………そのとおりだよ。僕達ピカチュウは人間界で人気があると前に聞いたんだ。だから、あいつらはうさぎのような姿をして人気を取ろうとしてんだ！ 僕はそれが憎いんだ！」

ピカチュウはロコンにそう話した。

「……………それは100%ないわね。ていうかどれだけ憎ん出んの？」

ロコンは呆れるように言った後突っ込んでピカチュウに返した。

「えーそれでは、選手の入場です」

ロコンたちが話しているうちに招集が終わり、選手は入場門からグランドに向かって出てきた。

「頑張れよ〜！」

ピカチュウはグラウンドに向かって声をかける。そして、整列をしたままスタート地点についた。

「では、ルール説明をしま〜す。まず、ここをスタートとしてグラウンドを1週して1年生の昇降口から校内に入って行きま〜す。そこから3棟屋上のプールに向かって行ってね〜」

そしてプラスルがルール説明を始めた。

ちなみにこの学校には新棟と1〜7までがある。

「そして、そこで100m泳いでプールを出て行って4棟の少人数教室で小テストを解いて最後に7棟の調理室で皆大好きなカレーを食べて折り返して、グラウンドを3週してゴールになるよ〜」

「とてつもなく長すぎる！ 時間大丈夫か？」

「うーんとね〜競技時間は1時間だつて〜」

ピカチュウが心配する中隣でジユペッタがそう呟いた。

「そしてさらにカントー学園特別ルールとして3人まで走者を交代することが出来るよ〜。ただし、交代できるのは出場表に書かれた補欠のみとなってるよ〜。なお、このレースは技や特技を使ってもいいけど、選手の妨害・校舎の破壊・自爆、大爆発を禁止してるからね〜。禁止事項が発覚した場合、そのクラスを失格にして体育祭が終わったあと後片付けをしてもらうからね〜」

「ルール説明が長すぎる……………」

ピカチュウは聞くのに疲れたのかいつもより声が出せずに突っ込んだ。

「それでは、行く前に交代を告げるクラスの代表者を決めてくださいーい」

マイナンがそういう。

「ここはピカチュウに任せよう」

「なんで!?!」

リオルが呟いたことにピカチュウが突っ込んだ。

「まあ、意外性を考えて……………」

「その理由だけで僕を使うの!?!」

「うん」

「……………リオル酷いよ」

リオルは冷静なのに対し、ピカチュウは涙を流している。リオルは何を嫌がっているのかわからない。

そしてピカチュウは仕方なく前が出る。

「では、全クラス代表者が出てきたようなので1年生からスタートしまーす」

1年チームメンバー

・1組

代表

ネイティオ

選手

ヒトカゲ

補欠

ゼニガメ

ケンタロス

ブースター

・2組

代表

プリン

選手

ワニノコ

補欠

エーファイ

ゴルバット

ドククラゲ

・3組

代表

モグリユー

選手

コラッタ

補欠

スワンナ

シャワーズ

オニゴリ

・ 4組

監督

ピカチュウ

選手

アギルダー

補欠

タマザラシ

ビリリダマ

リーフィア

・ 5組

代表

ストライク（双子の兄）

選手

ストライク（双子の弟）

補欠

メガヤンマ

ブラッキー

ソルロック

・ 6組

代表

イーブイ

選手

ニューラ

補欠

ミジュマル

サンダース

チヨロネコ

「双子の兄弟で出場するとか。ていうか同じクラスとか運がいいなあ〜」

「運じゃない！俺と兄貴の双子の力でこうなったのだ！」

「弟かいつ！なんで兄じゃないの普通言い返すのは兄だろ！」

ピカチュウは言い返してきたストライク（弟）に突っ込み返した。

「ちなみにね〜、1位を取ると10点、2位は8点、3位は6点、4位は4点、5位は2点、6位は0点各クラスの点数に入るよ〜」

「ここはトップを取りたいところだけど……………」

リオルは観客席でそう呟く。

「じゃあ、行くぞ〜。位置について……………」

スターターのリザードンがレーンの横でクラッカーを上に向けて用意の合図を送る。

この世界には銃というものが存在していない。なのでかわりに何故かクラッカーになった。

「……………よいい」

リザードンの声を聞くと自然と静かになっていく……………。

「……………どん！」

静まってから少し間を開けてスタートの合図と共にクラッカーを鳴らす。それを聞いた選手は同時にスタートする。

そして、選手たちは走っていった……………。

第12話 体育祭で大白熱!? 〽前編〽(後書き)

どうにか前編が終わりました。

プラスル「私たちって性格がほぼ同じじゃないですか?」

マイナン「そうそう」

うーん確かに……………ってプラスルとマイナンが初回から来てるし。

プラスル&マイナン「これからよろしくお願いしまーす!」

……………まさかそれいいに来たの?

プラスル&マイナン「そうだよ」

……………今回はおしまいっ(汗)

ピカチュウ「憎すぎる……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8480w/>

カントー私立ポケモン学園

2012年1月6日16時46分発行